

本研究は、学生と教員が地域社会と連携し、明石や大蔵谷の「地域の記憶」を発掘・継承していくことを目的として、(1)地域の人との古文書の解説、(2)古い写真の収集とその展示および写真を見た人の記憶語りの収集、(3)現在の大蔵谷及び明石の写真撮影とその展示、(4)学生演劇の公演、(5)稲爪神社祭祀への学生の参加、(6)大蔵谷の暮らしや歴史に関する聞き取り、(7)大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ、(8)ニュースレター等による情報の発信等を行った。以下、その成果を報告する。

- (1) については、Youtube の「明石ハウスチャンネル」から「オンラインくずし字解説講座」の動画を前年度から継続して公開している。教材には江戸時代後期の明石の地誌『明石名勝略記』を使用した。2024 年 4 月 15 日のチャンネル登録者数は 324 人であった。タグに「#源氏物語」を含んでいたためか、2024 年 1 月の大河ドラマ「光る君へ」放送開始後に、視聴者・チャンネル登録者が増加した。
- (2) については、地域の方々の協力のもと、記憶資料（写真、体験談）を収集した。写真展「稲爪神社 秋の大祭の物語」を継続した。団体見学の受け入れとして高齢者大学のいなみ野学園のあかし OB 会（約 30 名）の見学を案内した。
- (3) については、現在の大蔵谷及び明石において写真撮影を行い、稲爪神社夏祭りとは初詣において写真展を開催した。
- (4) については、中山ゼミ生他が第 1 回「大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ」として稲爪神社にて『リア王』をリーディング上演し、第 3 回は KAC マナビーホールにて『アタシのアカシ』を上演した。第 1 回では上演前に長谷川弘基教授による解説を加えることで戯曲の理解促進をはかった。学生に「高齢者問題」を身近なものとして考えてもらう試みであり、台本は伊藤茂本学名誉教授が松岡和子訳「リア王」（ちくま文庫）から再構成した。リアを演じることで学生たちは高齢者の心を知り、相手の立場に立って考える重要性を実感した。
- (5) については、学生と共に地域との連携を活性化させる取り組みとして、稲爪神社発信の地域連携活動を実施した。コロナ禍あけで 4 年ぶりに再開予定だった秋の大祭の学生神輿は雨天中止になった。
- (6) については、実践演習 I（矢嶋ゼミ）学生が、明石市の太寺地区や大蔵谷地区において、史跡を把握し、商店・事業所の事業内容について聞き取りをするフィールドワークを行った（明石市とバス事業者との産官学プロジェクト）。また、専攻演習 I、II（三田ゼミ）において、稲爪神社夏祭りや秋の大祭の奉納芸練習の場において学生らが聞き取り調査を行った。
- (7) については、第 2 回「大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ」として「明石 朝霧 人麻呂のまち」（中村健史准教授）を開催した。密になるリスクを考慮して前年度に続き明石ハウスではなく、今年度はあかし市民図書館にて行った。第 1 回と第 3 回は（4）に記載。
- (8) については、地域研究センターが主に明石・大蔵地域で実施している研究活動を一般の方々に広報することを目的とした「明石ハウス通信」を継続して刊行していたが（今年度は第 5、6 号）、他地域にも対応する意味で名称変更を行った「地域研究センター通信」を創刊し、今後はこちらを継続することになった。あわせて YouTube から過去の公開講座や「くずし字解説講座」の動画を継続して公開している。

以上、コロナ禍が明け、様々な活動が再開されていく中で、これまで継続してきた地域研究センター発信や稲爪神社発信の地域連携活動への双方向参加交流に加えて、松が丘地域での地域連携活動なども活発に行い、次の展開に向けて取り組めたことが本研究の大きな進展である。それぞれの活動において、地域の方々との対話を通じた双方向交流の活発化を工夫した。しかし、紙面上では活発な双方向交流に至らなかったなどの課題が残った。また、学生が参加する地域連携・研究活動が乏しかった点も反省点である。